

# 日中河川及びダム技術会議に出席して

本年（平成3年）の9月19日から9月28日まで上海市において行われた第7回日中河川及びダム技術会議に出席し、続いて上海、杭州、無錫等の都市の周辺や太湖および長江付近の公共土木施設を視察する機会を与えられた。

最近では中国を訪れる邦人は夥しい数に上っており、中国の河川の現況についても詳細な報告がなされているので、本文では、この視察旅行での見聞の一部について印象を述べるにとどめたい。なお、日中河川及びダム技術会議そのものについては雑誌「河川」の10月号を参照して載きたい。

## 江都水利センター

今回視察した河川や公共土木施設についての総合的印象を述べるとすれば、若干きめが粗い感じはあるにしても堤防、水・閘門、揚・排水ポンプ施設などの整備はかなり進んでいるということである。人民中国の建国以来あまり豊かであったとはいえない国家財政のなかで、これらの施設の建設に大へんな努力が払われた事実を物語るものであろう。

そのなかでも、とくにわれわれの興味を惹いたのは、揚州市の近くの江都水利センター（江都水利樞紐工程）である。

これは淮河の治水、66万haの農地の灌漑および水力発電を目的とするプロジェクトであって、その施設の主要なものは、4か所（ポンプ総数33、揚排水量合計毎秒263トン）のポンプ場と、5か所の船舶用の閘門とである。

興味深いのは、この役所は施設の管理運用のほか、貯水池を利用して養魚を行い、鶏を飼い、さらには製靴業まで営んでいることである。業務に従事する者は公務員であるから給与については一定の基準があり、儲かったからとい

って勝手に給料を上げる訳にはいかないようであるが、ボーナスを出すことは自由であるらしく、所長の説明によると去年は純益21.6万円を上げたので、冬のボーナスとして最高一人当たり580円を支給したそうである。

これらの施設の多くは文化大革命以前に建設に着手されており、「自力更生」政策を反映したせいか、当然鋼材を用いた方がよいと思われる水門の脚柱のような箇所にも、多分当時においては比較的容易に調達できた材料であるコンクリートを使用している。

ポンプ施設についても最初は写真-1に示すように8トン毎秒の小型ポンプを多数並べていたのが、最後に建設されたポンプ場では30トン毎秒のものを用いているといった具合に、そのときどきの技術力に応じて計画が作られているようである。



写真-2 太湖 ここまで水位が上がった。

## 太湖

太湖（写真-2）は大きな湖である。水深は平均1.89メートルしかないが、面積は琵琶湖の約3倍の2338平方キロある。この湖の流域内で全中国の17パーセントの生産活動が行われていることを反映して、流入河川の一部では水質汚濁が進行している。しかし、太湖全体としての水質の悪化はまだ見られないようである。

この湖については、（財）リバーフロント整備センターが建設省の委託を受けて数年前から種々の研究を実施中であるが、その結果などから考えると、太湖の直面する最大の課題は、長江と太湖とを結ぶ水路の整備と近代化のようである。これらの水路は洪水対策というよりも輸送路としての



写真-1 江都水利センターのポンプ場



財団法人 河川情報センター理事長  
(前(財)リバーフロント整備センター理事長) 西原 巧



写真-3 揚子江

役割の方に重点が置かれるのではないだろうか。

また、エレクトロニクス技術の普及の遅れにその原因があるのか、太湖の管理施設では水位その他の情報の伝達システムが不十分であるように思われた。今後の太湖の管理体制を考える場合の最大の課題の一つではないかという気がする。

#### 揚子江

筆者が子供の頃の小学校唱歌に「揚子江」というのがあった。一番の歌詞は確か次のようである。

雲より出て雲に入る 流れは遠し幾百里  
シナ大陸を貫きて 東へ注ぐ揚子江  
満々と水を湛えた揚子江…長江が眼前に現れたときは

感激だった。(写真-3)

狭さく部だから、川幅はせいぜい1200メートル程度だろう。水は粘土色である。ひっきりなしの大小の船の往来は壮観というほかはない。長江がそれに連なる多くの運河と共に中原の大動脈を形造っていることがよく解った。

#### 母子二景

中国の親はとても子供を大事にするという。写真-4は上海のホテル近くの公園での昼休み時のスナップだが、「一姫二太郎」で幸せそうなお母さんだった。

写真-5は運河の閘門を通過中の船(機帆船)の親子。一家の飼猫は自由に船上を行き来していたが、赤ん坊はしっかりと柱にくくりつけられていた。



写真-4 上海の公園の親子



写真-5 閘門を通る船の親子